

小島嶼国家の内発的发展と人材育成 (2)

— パラオにおけるアイデンティティと教育 —

廣瀬 淳一

(高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育部門)

The Strategy of Building up the Human Resources for Endogenous Development in Small Island Nation (2); with Special Reference to Palauan Identity and Education

Junichi Hirose

*Kochi University Research and Education Faculty,
Multidisciplinary Science Cluster, Collaborative Community Studies Unit*

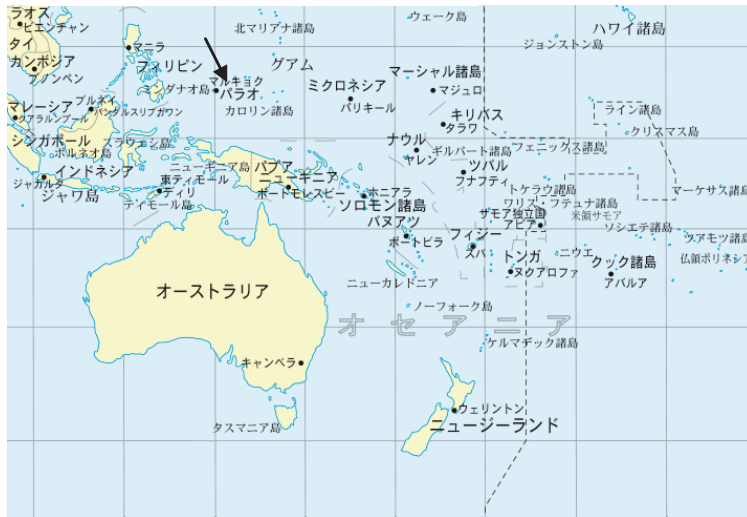
Abstract: This article explores education design suitable for “endogenous development” from comparative results between a collective identity and a school-taught education in Palau. According to Kawakatsu's way of thinking, Endogenous development is based on local people's criteria for development and takes into account their material, social and spiritual well-being. Endogenous development respects the principle of field logic at indigenous community. This type of development will be appropriate for the era of diverse knowledge.

Matriarchal system may form part of Palauan cultural identity. Palauan people benefit from traditional value of Palauan matrilineal system. However, fingers are pointing at existence of unseen task, which is a misallocation of burden for women. Modern education system does not give Palauan women a special consideration for traditional custom. And even some of Palauan women forget the value of traditional custom. Some young women who are lower-middle-class even question traditional moral values.

Author conducted an interview investigation for Palauan women separated by age. Question items are about their own business career, traditional sense of values and day-to-day world, and gender relations. In this research, Author confirmed the hypothesis of cross-subsidization strategy on same mother's side women. However Author also recognized the strong need to make a detailed study of an intricate relationship between modern Palauan women and traditional custom by analyzing the interviews.

Keyword: Endogenous development, traditional value, matrilineal society, Palau, mutual assistance

第1図 ミクロネシア地域の地図



出典：日本政府統計局

第2図 パラオ共和国の地図



出典：パラオ政府観光局

はじめに

西太平洋の小島嶼国であるパラオ共和国（以後、パラオ）は、19世紀後半頃からスペイン、ドイツ、日本、アメリカなど時の大国による統治を受け続けてきた。パラオは1994年にアメリカの自由連合国として独立し¹、独立した後も内発性の根源につながる母系社会の伝統を維持しながら、政治、行政、教育、医療等の分野ではアメリカ式の制度を取り入れてきた。かつて社会学者の鶴見は「近代合理性の考え方そのものが西欧社会の内発的発展の結果つくられた成果である」と述べた（川勝・鶴見 2008）。パラオもアメリカの内発的発展の結果として作られた諸制度を導入しながらも、パラオの生活に根差した内発的発展のかたちを活かしているのだろうか。鶴見は、非西欧社会の住民が内発性から外部との接触で得たものを採り入れ、多発的・多系的な発展に到達することは可能であるという（川勝・鶴見 2008）。この考え方に従えば、西欧合理性の成果物を巧みに採り入れることで、地縁・血縁が息づく伝統的な社会においても、新たな内発的発展を喚起することが可能であると言ってよいだろう。

廣瀬（2016）は、パラオの教育計画が国際機関の提案を受け入れるものである一方で、人口が1.7万人ほどの国家にとっては財政のみならず人的資源においても大きな負担になっており、その両方に対して国際機関、外国政府、国際NGOなどの外部からの支援無くしては運営がままならない現状があることを指摘している。その土地のヴァナキユラーな生活世界を熟知しない外部者が制度設計に深く関与していること、そして自らの生活世界を外部に説明できないパラオの若者もまた増えていることは、パラオの内発性を制度に反映させるうえで高いハードルである。パラオの若者である Soaladaob（2010）は、ニュージーランドで修士課程の学生の時、自身が小学校卒業からのち国外で教育を受けてきたこと、その思考のほとんどを英語で行ってきたことを振り返り、パラオの言葉や知識と外国で得た知識とのバランスを考えても、自分のアイデンティティがパラオ人であることを確認するために相当の努力を必要としたことを記している。

筆者の関心は、鶴見が期待する内発的発展のごとく、パラオの内発性と西欧世界の内発性がハイブリッドした発展が果たして可能かどうかということ。仮にそれが可能であったとして、西欧の内発性から生まれた制度や行動規範に単に取り込まれていくのではなく、持続可能な仕組みとして定着するのかどうかという点である。そこで本稿では、今後実施を予定している質問紙調査、聞き取り調査の質問項目を決定するための

予備調査として、パラオの内発的発展を支える価値観と人材育成の側面に注目しながら、廣瀬(2016)がパラオの若い女性が留学奨学金の獲得数や外国への就職機会を求める意欲において男性を大きく上回っていると指摘していることを受けて、パラオの女性の考え方や行動について、内発的発展に深く関係していると考えられる母系的な価値観や行動様式との関係の「見える化」に取り組んだ。方法としては、文献調査に加えて、30代、40代、50代でキャリアを積んでいるパラオ人女性に対して、①キャリア、②伝統と日常生活、③男女のキーワードについて行ったインタビューを分析することとした。

1. パラオの自然と社会

本節では、内発的発展を喚起する基礎となるパラオにおける「地縁・血縁が息づく伝統的な社会」について概観しておく。

(1) パラオの自然と人々のアイデンティティ

パラオは日本の屋久島(504.88平方キロメートル)と同程度の大きさの島嶼国である。西太平洋カロリン諸島の西端、北緯3~8度、東経130~134度に位置しており、気候は熱帯海洋性気候で年間平均気温は27度~28度で推移し一年を通じて変化が少ない。

パラオの人口は約2万人で、隆起珊瑚の小島にあるコロール州に約7割の人々が生活している。政体は、各州を統括する連邦政府による統治に加えて、伝統的に島を二分割統治した二大首長を頂に置いた首長体制が併存している。このように、パラオでは、伝統の政治とアメリカ式の政治とが形式的には併存する国家運営を行っている。この人口2万人に満たない小さな国家は、伝統首長体制に沿った集落を基準とした16州から構成されている。そして、それぞれの州はアレキサンダー(2003)が指摘するように、「村、大家族、地域などに対するアイデンティティが国に対するアイデンティティより強い」。とくに地方州には固有の文化が根強く残り、時には中央政府のそれに勝る。これを川勝の視点で捉えれば、パラオ住民の内発的発展を支えるアイデンティティの所在は、村、大家族、地域にあると考えることが出来る。パラオの村には独自のルールが沢山あるが、それらは親族集団が自然資源を持続的に利用して生活していくための工夫であり、人々の暮らしが土地やその自然資源と不可分な密接な関係を築いてきたことの現れでもある。この文脈においてパラオの生活世界における教育とは、人と自然、人と社会、社会と自然など多様な関係性の総体に関係する²。パラオの内発的発展はコミュニティと不可分の教育が必要となる。

(2) 母系社会の女性と文化

パラオはアメリカの影響を強く受けているが、伝統的な価値観もいまだ社会の地盤に深く根付いている。パラオの内発性に深く関与しているのは伝統的な母系社会の仕組であり、所属する親族集団への帰属はパラオ人にとって最も重要なことである。母系社会のパラオにおいて母系集団の力は大きく、地位の継承や財産の相続においては母系集団の系統が正統として優遇される。そして、伝統的な行事(customary practices)における財貨の移動が女性を通じて行われること、また「伝統的なリーダーや政治家には男性が多いが、親族集団の関係を活かしながら女性が進言することが一般的に見られ、またその進言が重く受けとめられる³」などの意見があることから、パラオでは「女性が強い」という言葉がよく聞かれる。

伝統的な行事はシュウカン(siu kang)と呼ばれ、お金がかかる行事も多い。もともとは同族集団の結束を高めることに加えて、親族の拡大を願う人間関係のメンテナンスのような意味合いもあったが、やがて政治やビジネスにも関連付けられるようになったことで、その機能は複雑化している⁴。パラオ人にとって格別な行事のひとつがオマガット(omengat)である。この言葉の意味は「スチームバス(steam bath)」であり、第1子出産後2、3か月後に行われるお披露目の儀礼である⁵。儀礼の実施には多額の費用が必要となる。この費用を賄ううえで女性には経済的な負担や管理運営能力が求められるのである。一般的に新郎側の親族集団の

女性は現金や亀の甲羅などを用意する。新婦側の親族集団の女性はもてなしの食事を用意する。新郎側の女性は関係者からからもたらされた現金や伝統貨幣を計算し、帳簿につける⁶。この記録は、次回以降の儀礼での返礼や親族間の協力関係に大いに影響してくる。女性は親族集団の金銭のやり取りで重要な役割を担う技術を求められるのである。パラオの女性は幼少の頃から「ウドウド(udoudo)」と呼ばれる首飾りを身に付ける。ウドウドとはパラオ語で財貨を意味する言葉である。ウドウドの価値はそれぞれが持つ歴史的な価値による。ウドウドにはそれが集団間の交換行為の中でどのような意味を持つかという点が重要で、女性は母からウドウドを受け継ぐときにそのストーリーを口承伝承で学ぶ。無文字社会であったパラオの伝統的な継承方法であり、現在でもそのストーリーを文字に起こすことは好ましくないと考える者もいる(Kesolei 1997)。このような知識には集団の秘密、血縁の秘密や財産の秘密も含まれるとされており、パラオの女子は成長に伴って価値の高いウドウドを継承していく。その一方で男子は叔父から漁労の技術や操船術等を教わるものの、伝統的な知識やストーリーにおいてはその量は女子とは比べ物にならないほど少ないという⁷。

2. パラオの家族

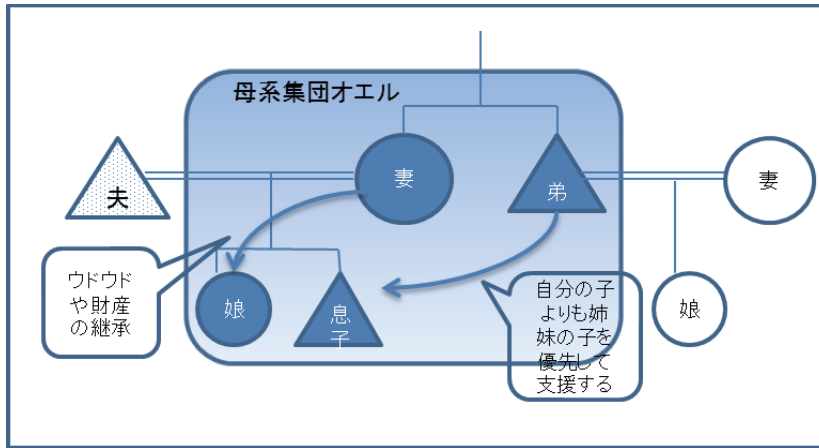
(1) 母系親族と家族

パラオでは母系親族集団(オエル)と父系親族集団(ウレエル)があり、財産や知識に関する権利の優先権はオエルにある。パラオでは男女ともに基本的にはオエルに属するが、何らかの理由でオエルに属することが出来ない場合はウレエルに属することが出来るし、オエルとウレエルの両方に属する場合もなくはない。

大家族のイメージが強いパラオの家族も、核家族が珍しくなくなっている。しかし、パラオの核家族は日本のそれとはだいぶ構造と機能が異なる。例えば、図3のように夫婦間に男女それぞれの子どもがいる4人家族の場合、パラオでは夫と妻、子どもは別の親族に属する。つまり、家の中で夫は妻子からみて「よそのもの」である。他方で、妻に弟がいた場合、彼は夫の妻子と同じ親族集団のメンバーである。妻の弟は姉の家の傍に居を構えるか、ちよくちよく姉妹の家に現れたり、入り浸ったりする。妻の弟には妻子があるが、彼の妻子もまた別の親族集団に属している場合が多い⁸。さて、息子にとってちよくちよく現われるオジは、パラオの男子として身に付けておくべき技能を教えてくれる。男子の子どもたちに尋ねてみれば、その多くが操船、水泳、釣り、狩猟、竹細工、大工仕事、肉や魚の調理⁹をオジに教わったと答えるだろう。また、オジは姉の娘に経済的な事も含めて色々な配慮をする必要がある。筆者が2003年から2005年にホームステイした家では、ホストマザーの弟(高校の数学教師)が毎日のように家に来て、時々肉や魚の調理や家財の修理をしていた。彼が言うには、例えばクリスマスの日には自分の息子よりも高価なものを息子よりも先に姉の娘に上げる必要がある。そして、もし、姉の娘が大学で留学したいと言えば自分の息子の教育よりも優先して学費の捻出のために努力しなくてはならない、と。筆者がホームステイ中に小学生だった娘はオジの援助も得てハワイの大学に留学した。

また、ホストマザーは次のように教えてくれた。パラオの女性は、幼少時にウドウドと呼ばれる伝統貨幣を母方から継承するが、ウドウドにはそれぞれ物語が決められていて、価値の高いものにはより重要な物語が込められている。パラオの女性はその資格と年齢や能力に応じてウドウドを受け継ぎ、伝統的知識を獲得していく。パラオは母系的な社会で財産や称号は母娘のラインで継承されていく。女性は幼い時から財産や重要な話に触れ、伝統的な儀式に参加することで、同性代の男性に比べても現実的な考え方を身に付け、それにとまって勉強への意欲も出てくる。形式的には財産の管理は母系親族の男性であるので、図3では弟、次に妻の息子が責任を持つことになるが、よほど家柄が良いところでもなければ母系親族の女性が日常の財産管理もその責任も負っている。ホストマザーによれば、母系親族の男性が責任者になっても、実は親族の必要な情報は女性が口承伝承で受け継いできていて、逐一母系親族の女性に確認しなくては仕事が進まないため、女性にまかせっきりになっている男性は多いのだそうだ。

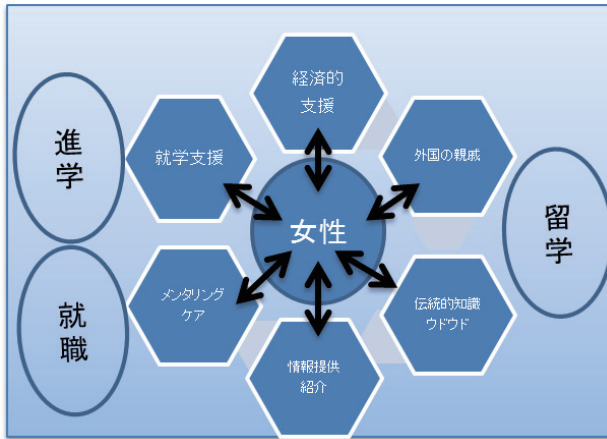
第 3 図. 母系親族の家族



出典：筆者作成

(2) 母系親族と女性の協力

第 4 図. 親族女性の相互協力 (筆者作成)



法的には、パラオの教育と職業機会は公法 PL4-57 で保証されている。この法律ではすべてのパラオ市民がパラオの発展に寄与する経済活動や社会活動に参加できるように、知識や技術を学ぶ機会を保障している。パラオ教育省は、教育のビジョンとして「パラオの児童・生徒・学生がパラオ社会及び世界で活躍すること」を示し、そのミッションとして「政府、児童・生徒・学生、保護者が協力して、学習環境を整えて、効果的な教育を提供し、若者を成功に導くこと」を掲げている。パラオが独立する

際に定めた「教育発展のためのミレニアム基本計画」では、小さな島嶼国における伝統ある暮らしをもとに、持続可能な発展を展開することを目標としており、特に尊敬、共有と協力、共同体の活動や意思決定への参画、文化遺産・伝統文化や技術の知識や受容、責任感と自助、精神的な価値観、謙虚さという伝統的な教育の価値を強調している。しかしながら、教育省が行う教育はアメリカ式の教育を重視していて、学校教育の中に置いて伝統的な価値がパラオ社会の構造と機能にどのように関係しているかに関して学ぶ機会はない。

1996 年の国家開発計画における教育分野のプランでは、アメリカ進学に適応し、パラオ市民の要請に沿った教育カリキュラムを開発することや、専門職業人材の育成に重点を置くことが示されており、パラオの初等、中等、高等教育における具体的な学校教育はこの開発計画のなかのビジョンで進められてきた。パラオの人々は、女性が行ってきたタロイモの栽培や沿岸の浅瀬での海洋生物の採取や、男性が行ってきた漁労や地域の普請を、母系社会の人間関係や価値観を変わず基礎として、近代セクターの様々な「仕事」をブリコロール (bricoleur) 的に組立てながら利用している。近代化以前のパラオにおいても、母系親族の女性は相互協力を行っていた。母系の仕組によって土地や財産、地位を継承してきた社会では、女性は「財貨の道」と呼ばれるように女性を通じて富が移動した。母系親族の女性が力を持つことは親族全体の勢力の拡大に影響し、それは子孫の繁栄につながった。その伝統的な仕組みはマイナーチェンジを経ながらも継承されており、図 4 のように同じ母系親族の女性が親族集団に貢献しやすいように、教育機会や就職の機会に関わる、財政面も含めた多様な支援が行われていることが確認されている (廣瀬 2010)。しかし、その母系親族集団のメンバー間でどのようなルールで支援が行われているかについては、親族集団の重要な知識や秘密に属

する内容も多いことから情報が断片的であり、その仕組みの解明は課題となっている。

3. パラオ女性のキャリア、伝統と日常生活、そしてジェンダー

本節ではパラオ女性からの聞き取りを通じて、パラオの女性と母系社会の特徴について考える。聞き取りでは、1994年のパラオ独立以前と以後の変化を経験し、職業経験を積んできた30代、40代、50代の女性を1人ずつ選び、キャリア、伝統と日常生活、そしてジェンダーの3つのトピックについて聞いた。聞き取りは英語で行い、筆者が仮訳した。聞き取りの様子はICレコーダーで録音し、右の3つのトピックを抽出した。

(1) 30代女性：小学校教諭（バベルダオブ島北部：2016年8月27日）

【キャリアについて】実家はコロールにある。パラオ高校を卒業後、コミュニティカレッジのリベラルアーツ科に通った。そのあと、教育省附属の図書館で任期付きのポストに就いた。4年位図書館関係の業務について、正職員になった。それから上司の薦めもあって研修を受けて情報技術の教員として働けるようになった。自分から希望を出したわけではないが、職場と親族との話の中でバベルダオブ島北部A州の小学校でコンピューター室の教員に任命された。

私の母はA州出身で、コロールで看護師をしていた。父はB州出身で、コロールで小学校の教員をしていた。パラオでは母方の出身地への帰属が強いのでA州に引っ越すことは当然のことと考えた。母の姉(S)がA州に住んでいて、その夫はA州出身で元小学校の教師(S')だった。私はSの息子が経営している小売店の2階に部屋を借りて、A州の小学校に勤務した。私と同年のSの長女MもA州小学校の教員で高学年の担任をしている。彼女は優秀でパラオ高校を卒業後にすぐにA州の小学校教員になった。なので、同年だけでも教員としてのキャリアはMの方が上である。

私は週末にコロールに行き、教育省のプログラムを使っていくつか教育に関係する資格を取った。公費の補助が出るコースもあるけれど、私費を使って受講したコースもあった。いとこのMはコミュニティカレッジで準学士を取得した後、遠隔教育でアメリカのサンディエゴ州立大学で教育学士を取得した。彼女は教授法を専攻した。私もMはじめ周囲から情報をもらって教育省の現職教員研修制度を使い、遠隔教育とスクーリングの併用でアメリカのサンディエゴ州立大学の教育学士を取得した。専門はIT教育。そして、IT教育スペシャリストに昇格した。2016年からはA州の小学校で副校長(Acting Principal)として働きだした。パラオでは教職員も学力テストを受ける必要があり、成績が公開される。私は副校長なのに成績はMより順番で2つ下だったので、すこし馬鹿にされている(笑)。

【伝統と日常生活について】学士を取得してから、教員としてキャリアを積んでいこうと決心した。そして、昨年、叔母の家の敷地の端に土地を借りて一戸建てを立てた。さすがにパラオで独身の女性で一戸建てを立てた時はビックリされた。でも、教員としてキャリアを積んでいくと覚悟を決めた時、ひとりで過ごせる時間を多くしたいと思った。30代前半なのに住宅ローンを抱えてしまった(笑)。それでも私はひとりの時間を持ちたいと思った。①パラオでは生まれた以上は自動的に親族との関係やシュウカンに巻き込まれる。しょうがないと思うけれど、年配の人たちよりは自分はシュウカンにはピンとくるものが少ないと思う。たぶんだけれど、自分の同世代の女性は同じではないだろうか。男性のことはわからないけど。②学校でシュウカンをはじめとする伝統について学んだことはないし、そういう授業もない。高校の授業にパラオ学があるけれど、パラオ語の授業といった感じで体系的な知識ではない。だからと言って、③家庭でも伝統的な知識について体系的に学んだ記憶はない。ただ、シュウカンの儀式のときや家庭での何気ない時に話は聞いているのだと思うが、やはり体系的に伝えられると言われても自分には出来ない。ぼんやりしている。自分は伝統的なタイトルは多分受継ぐのだろうけれど、あまり欲しいとは思わない。何かと女性の方が職業以外の仕事が多いので、④親族との情報交換の機会が多いと思うし、金銭的な援助をし合う時もあるけれど、それほ

ど大きな負担のものでは無いし、義務感でもない。小さなときから仲良くしている人だから助け合っている
といった感じだ。タイトルを継承する若者が積極的に留学後パラオに帰ってくるかについては私にはわから
ないけれど、そのような気もする。

【男性と女性について】若い女性は、小さな頃からウドウドや伝統についての話を聞いて育っているので、主観だけれど、男性よりもしっかりしていると思う。そして、⑤女性はよく勉強をする。昔は、クランのこ
とや家計をやりくりするための勉強をしたけれど、最近は大学進学のための勉強をするようになっている。⑥男性
にはボート運転手や力仕事を伴うポストで公務員の職に就くことが出来た。女性は学力を必要とするポスト
を狙う必要があった。奨学金を狙って早くから勉強しているのも女性が多いように思う。もともと学ぶこと
に慣れているので、女性の強みを活かそうとすると勉強が良いように思う。パラオには4年制大学が無いの
で、アメリカやニュージーランドの大学に進学するために奨学金を獲得する必要がある。奨学金の獲得に失
敗したら、先に渡米している親戚を頼って身を寄せて、大学進学のを待つ若者も多い。大学進学のため
に米軍に入隊する若者はいるし、また大学で学位を取得した後に、米軍に入隊する者もいる。後者の場合は
よりよい暮らしをもとめて高い地位の軍人を目指している。⑦伝統首長は伝統的な価値(traditional value)の
大切さを語るが、その意味をちゃんと理解できるものは限られていると思う。たぶん私はできていない。政
府や伝統首長会議がどのような方法で若者や子どもたちに伝統的な価値を伝えようとしているのかは分から
ない。私自身はシュウカンが無くなって、個人個人の社会が来て、学校もオンラインの授業が中心になっ
てもいいと思っているけれど、やっぱりそれだと味気ないだろうか。職場のジェンダーについては、はっきり
とした理由は分からないけれど、クラスルーム・ティーチャーは年々女性が増えている。社会や算数を指導
していた教員も体育(PE)教師になってしまう。男性はイージーな方を選ぶのかなと思ってしまう。

(2) 40代女性：非営利団体専門職（コロール州：2016年8月25日）

【キャリアについて】パラオの女性は冒険に憧れている。⑧パラオでは伝統的なシュウカンによる制約も
多く女性の負担は大きい。しかし、それを知っているので、パラオの女性が自分のキャリアをデザインする
ために国外に出ることは社会にも受け入れられている。⑨感性的には女性よりも男性が国内、家に残って親
族の面倒を見ているほうが多い。母親のケアを男性がする場合も珍しくない。男性も女性もアメリカに働き
に行く若者は多い。年老いた両親にケアが必要となると、フィリピン人を雇うようにお金を送金する。それ
が近年のトレンド。あるいは、アメリカに両親を呼び寄せることも珍しくはない。

自分はアメリカで学位を取得し、アメリカで仕事をしていたけれど、親族に送金することを熱心にしてしまっただけで体を壊してしまった。送金するお金を確保するために自分の食事を疎かにしてしまい、それが原因で病気になってしまった。親族の女性からはお金は自分のことに使って、ストレスをためないようにとアドバイスされた。それ以降は、援助する内容をよく選んでいる。私は良いポストに恵まれたけれど、自分の性格的に自己主張が強いので、時々職場で疎まれてしまう。それでも、能力を買って声をかけてくれる人がいて、今の仕事に就いている。今の仕事は、新しい分野であるのでわからないところもあるけれど、それが新鮮。また、これまでのすべてのキャリアが活かせる仕事なので楽しくできている。これから、組織開発の専門職として働き続けるように頑張りたいと思っている。

パラオの若者ではアメリカ軍に入隊したいという人が増えている。高卒で入隊するとE1ランキングから始めてE7ランキングを経て、コミッションオフィサーになると収入も年10,000ドルほど上がる。もちろん、サラリーだけでなく住居やその他のサポートも良くなる。だから、私は親戚の若い子たちにはまずパラオコミュニティカレッジに入って準学士を取得後、6か月のトレーニングと試験を受けてコミッションオフィサーになるように教えている。その後、仕事をしながら軍隊価格で大学に入学して学位を取るとパラオ語で「Agari(上がり)」ということになる。なかには自費でアメリカの大学の学位を取り、その後に入隊する人

もいる。女性も結構いる。学位を取ってから軍に入ると、派遣先を選べることや、良い内容の仕事に就けること、住居などの条件が格段に良くなるなどが魅力とされている。ただ、勉強ができて、家族思いの若者が軍隊を選ぶことには個人的にはつらい。

【伝統と日常生活について】⑩誰が伝統的な知識を子どもたちに伝えているか、教育省でないことは間違いない。教育省は全く持ってアメリカ的な教育をすることを目標にしている。アメリカの教育は男女平等を謳うのかもしれないが、母系社会の女性を公正に扱うとの配慮は当然ない。私が1987年にパラオ高校に入学した時もパラオ学の時間は選択科目であったけれど、内容はパラオ語の授業でその他のことについては学んだ記憶がない。⑪パラオではおそらくシュウカンの時が、子どもたちがパラオの価値を学ぶ一番ポピュラーな機会だと思う。

1996年頃の自分の記憶を辿ると、学校が終わって帰宅すると母親は家にいたし、父も近くで働いていた。今ではバベルダオブ島でも両親はコロールで働いて、子どもを祖母や叔母の家に預けて面倒を見てもらうことは一般的。両親はコロールに住んでいて、平日はコロールで仕事、週末に食料など買い物して地元に戻る。祖母は学校を卒業するまで孫の面倒を見るということもパラオではよくあること。地方でも（乳幼児の）デイケアセンターやヘッドスタートプログラムがあるので、そんなに負担ではない。子どもは小学生にもなれば、祖父母や弟妹の面倒も見てくれる。それに、祖父母のところで育った子供の方が、魚釣りや調理、竹の採取、人間関係など伝統的な生活技術を身に付けている場合が多い。田舎にいたから外国に留学できなかったという話もない。伝統的な知識も身に付けたうえで大学に留学する若者は色んな意味で優秀だ。コロールにはスパゲティやピザなどを好んで食べる子どもが多く、魚やタロを好きじゃないと聞くこともある。

私がアメリカで働いていた時に比べれば、今の収入は少ない。でも、パラオでは良い方。私がパラオにいれば、誰かが魚やタロやポークを持ってきてくれる。昨晚も隣の敷地に住んでいる甥がナイスサイズのフェフキ鯛を5匹くれた。買えば30ドルくらいする。確かにシュウカンで細かいものでは20ドル位から数百ドルの範囲で毎週のようにお金が出ていくけれど、普段の生活に困ることはない。でも、スパゲティやピザを食べ続けるにはお金は必要。これからの若い人はお金がかかる生活を夢見ている。

【男性と女性について】私の妹はテキサスで働いている。この4月に、その妹から500ドルが送られてきた。そして、「お姉さん、このお金はシュウカンや親のためではなくて、お姉さん自身がパラオのリゾートに宿泊して素敵な朝食をとることに使って」と言われた。私はありがたく受け取ってからこう言った。「私はアメリカで生活した経験があるから、日常の生活にどれくらいお金がかかるか知っている。ごみを捨てるにも、車を止めるにもお金がかかる。だから、次からは送ったと思って銀行に貯金しなさい。もし、あなたがアメリカで病気になって治療に1000ドルかかる、お金が必要と連絡をもらえば、わたしは何としても1000ドル集めてあなたに送金する。だから、貯金しておきなさい」と。彼女の借家の家賃は月1200ドル。私は親戚から家を借りているけれど、無料でいいと言われた。無料だと私が嫌なので毎月100ドルだけ払っている。先ほど、パラオにいれば食べ物に困らないと言ったように、何とかなくなってしまふ。アメリカに住んでいる妹に負担をかけるわけにはいかない。確か、2015年版の家計調査で女性世帯主の収入が男性に比較して少ないと書かれていた。確かにそうなのかもしれない。ただし、⑫パラオ人はチームで生活しているのだから、電気代、食費、交通費、教育費など細かく区分して親族で助け合っている。そのようなお金の動きは統計上出てこないのではないか。

パラオの女性はシュウカンにお金がかかる。20ドル、50ドルのものから、数百ドルのものまで様々な貢献をする。だから、⑬シュウカンから逃れるために外国に行きたいという女性が多いのも事実。取りあえず近くにいなければ、小さなシュウカンに巻き込まれることは少なくなる。ただし、近年はフェイスブックなどSNSでパラオから送金を依頼するメッセージが送られてくるようになった。まだ、昔ながらの意識のままの

人も多いということだと思う。

パラオ国立奨学金委員会に資金提供団体が掲示してある。外国政府や企業の名前のほか、小さな団体の名前を見つけられると思う。それらの団体の多くは女性団体であることが多い。ただし、奨学金は男女にかかわらずに提供する。たしか、「サンドラ・スマン奨学金」は女性を対象にした奨学金を設けていたと思う。女性は幼い時からウドウドの継承やシュウカンのお金の管理を手伝って育つのでより男性よりも早くからリアリストになる。

(3) 50代女性：非営利団体事務職（コロール州）

【キャリアについて】1995年頃から現在の団体で事務職をしている。もう少し働いたらリタイア。リタイア後は自分が副業でやってきた不動産の仕事を本業にして、たぶん今の事務所の仕事も少し手伝うと思う。今の仕事では自分の関心や自分の人脈も活かして、向いている仕事だと思う。公務員と比較しても待遇は悪くないし、技術研修や海外視察にも何度も行けたので、キャリア形成にも役立った。現在は、上級事務員として代表をサポートする仕事をしている。⑭パラオでは女性が仕事を持ち続けることが普通のことなので、逆に働くことが出来るのに働いていないと周囲から不思議がられると思う。だからといって非難されることはもちろんない。何歳からでも勉強は始められるし、昔取得した資格や学位も活かせるし、能力があればいつからでも働き始められるのは人口が少なく、人材不足のパラオの利点ではある。外国で学んで学位や資格を取って帰ってくれば、分野によってはパラオの第一人者として外国政府ともやり取りすることになるし、やりがいのある仕事に就ける。⑮外国で学位を取り、一定の職歴を持った若者でパラオに帰ってきている者の中には、単純な金銭的収入よりも、専門的知識を活かしてローカルな活動であるけれど、国際的な貢献につながる仕事を求めている者が目に留まる。これは男性も女性も両方に当てはまると思う。

公務員、通信や電力などの準公務員、航空会社、銀行などでは女性の方が目立っている印象がある。しかし、政治の分野では女性はあまり前に出たがらない。2016年の大統領選挙に女性が立候補しているが、まだ例外的な扱いだと思う。政治家になれば公衆の面前やマスメディアでも非難されたりすることもあるだろうが、パラオでは年配の女性は最も尊敬される存在であって公衆の面前で罵られたりすることがあると、周囲の私たちの方が気持ちもつらくなる。それでも、今後は女性も政治分野で活躍するようになるかもしれないが、その結果クランの繁栄を共通目標として、男性を支えることで保たれてきた社会のジェンダーバランスが崩れる危険性は否定できない。

【伝統と日常生活について】パラオの親族集団のグループはたくさんあって、どのくらいの数があるか私にははっきり言うことが出来ない。⑯母系社会なので、母系のラインでいくつもの親族集団と関係がある。その都度使い分ける。ニワール州に行くときはニワールの血縁を主張するし、マルキョク州に行けばマルキョクの血縁を主張する。わたしはその他にペリリュウの血縁もある。ただし、自分とその血縁集団の関係の強さという問題もあるし、関係のある血縁集団のその土地での影響力もあるので、利用の仕方も複雑になる。⑰強い結びつきのクランではシュウカンへの関与の度合いも高まるし、お金もかかる。関係性の小さなクランであればお付き合い程度のお金しかかからない。どちらにしても、伝統的な儀礼への貢献で負担が大きいのは男性よりも女性だということは言ってもいいと思う。外国で働く女性も増えていて、パラオにいる親族に送金することも一般的であるが、とくに利用目的を決めない経済援助であって金額も自分が出来る範囲でするというのが一般的ではないか。⑱親族女性に教育のための経済援助をする場合は、とつても近い親族の場合で将来的に儀礼などを協働で行う可能性が高い人。その他は、困っている時に手を差し伸べる程度ではないか。しかし、最近少し問題になっていることは、伝統的なシュウカンの仕組みを現代的な文脈の中で利用しようとするケースが増えていること。例えば、何度も儀式をやって資金を集めるだけみたいなものも見られるようになった。今年は大統領や上院議員の選挙の年だけれど、かつてに比べたらものすごい金額が伝統

的な文脈で動いている。伝統的な文脈といわゆるアメリカ的な制度の運営には、どこかで線引きがされていて、ブレーキとなるものもあった。しかし、アメリカ的な考え方や生活スタイルを当たり前と感じる人の割合が増えたからであるのか、歯止めが利かなくなるのではないかと少し心配している。

【男性と女性について】お金については女性の負担が大きいので、近い存在のグループにいる年下の女性にはよい教育機会や良い就職先を気にかける。⑨高校生の時から留学する者も多くなっている、伝統的儀礼で若い人たちが集まる機会も少なくなっている。最近では、フェイスブック等の SNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス) でメンバーが連絡を取りやすく繋がっている。男性もメンバーとして参加しているが、女性が多い。⑩同世代や近い世代の女性は幼少の頃から小さなグループをつくって頻りにちょっとした女子会をしている。グループの女子で集まっておそろいの T シャツをつくったりして楽しんでいるようだ。自分が若いころには SNS はなかったけれど、同じように集まっていた。方法は変化したけれど、近しい集団の女性と絆を強めるといふ点では目的は同じだと思う。

男性については、たぶん、釣りに行くときの船の上やキンロウハウシ (勤労奉仕) で草刈りをしている時など、作業で集まった時にいろいろ情報交換していると思う。若い子はバスケットボールや野球の練習の時を利用しているのだろうと思う。パラオでは出身州ごとにチームがあって、州対抗の全国大会などが行われる。近しいグループのメンバーと交流する良い機会になっている。

(4) 聞き取りのまとめ

パラオの母系親族集団の働きやシュウカン等へ貢献は、しばしば女性の負担の大きさを語るうえで言及されてきた。実際聞き取りにおいても (1) の下線①のように、生まれながらにシュウカンに組込まれる様子が語られた。また、パラオの女性当人の認識では必ずしも明確な規則で行動を縛られているわけでもないようである。(3) の下線⑩⑪からも、パラオ人が母系の系統を重視しながら状況に応じて柔軟に親族集団への帰属の度合いを調整し使い分けていることがわかる。(2) 下線⑨では、男性が国内、家に残って親族、特に母親の面倒を見ている事も珍しくない旨が述べられており、人口統計のうえで国内において女性が男性に比べて少ない現象に関しても一つの説明になるのではないだろうか (廣瀬 2016)。

次に、若者がどのように母系社会の知識を得ているのかという点についても曖昧な点が多かった。それはパラオ人もその伝統的な知識を明確に理解していないことによる曖昧さではなかったかと考えられる。教育についても (1) 下線②、(2) の下線⑩からは、教育省がアメリカ式のカリキュラムを行っていて、伝統に属する知識の教育は所掌ではないことがうかがえる。また、(1) 下線③⑦、(2) 下線⑩からは、家庭においても伝統的な知識を体系的に学ぶ機会はまだ少なく、伝統に属する知識はシュウカンのような親族の協働作業の機会において経験から身に付けるものと認識されていることもわかった。さらに、(3) 下線⑬のように、近年は外国留学する高校生も多くなっており、シュウカンのような伝統的儀礼で若い人たちが集まる機会も少なくいことから、若者が伝統的な知識を得る機会がますます少ない状況が推察される。また、伝統に属する儀礼を司る伝統首長にしても、若者にどのように伝統的価値を伝えるかという組織的な戦略のあるなしを少なくとも国民は把握していない。

しかし、そのような伝統的な知識は何となしに身に付けるべきものにしては、女性が具体的に担う負担が甚だ大きい。(2) 下線⑧⑬、(3) ⑭でも言及されているように、シュウカン等の経済的負担の大きさから、女性が子育てしながら働くこと、外国で学び働くことに対して家族はよく理解している。近年はフェイスブック等の SNS を通じて親族が繋がっていることから、外国に住んでいる親族に気軽に支援を申し出やすくなったという点は現代的な現象も起きている。(1) 下線⑤⑥の言及では、女性は学力を必要とする職業ポストに就くために、大学進学をめざして奨学金を積極的に取りに行っている様子もわかる。女性はかつて親族集団の経済的やりくりのための勉強をしたが、近年は女性の勉強の目的は大学進学である。

親族集団の女性同士の相互協力については、一般的に聞かれているよりは「ゆるやかな」連携と受け取れる言及があった。例えば、(1) 下線④では、親族との情報交換の機会も多く、金銭的な援助をし合う時もあるが、義務的に行なっているわけではなく、負担もそれほど大きくない。また、(2) 下線⑩によれば、パラオ人はチームで生活しているので、電気代、食費、交通費、教育費など細分化して親族 1 人当たりの負担を小さくして助け合っている。幼少の時から親しくしている延長として助けあっているという。同様のことは(3) 下線⑬⑭からもうかがえる。特に⑭のように親族集団の女子が幼少の時から小さいグループをつくって行動している姿は筆者も多々観察しており、女性同士の協力を自然に促す何らかの戦略でないかとも考えた。

4. パラオの教育熱

(1) 進学熱と留学

パラオには4年制以上の高等教育機関がないため、大学進学を希望する若者は奨学金を獲てアメリカやオーストラリアに留学する。近年では、日本、台湾、韓国などの国費留学の制度を利用する若者も増えている。パラオ・コミュニティ・カレッジ(PCC)のアドミッションセンターによれば、5年間で2000人程の若者が外国に留学している。日本政府国費留学については、ミクロネシア3国で2名の推薦枠の内、パラオの学生が推薦枠を独占することもあった。また、留学のほかに、例えば日本の国際協力機構(JICA)が提供する技術協力の外国研修についても、パラオ国内で高く評価される。そのため、かつてはある技術の習得のために派遣された研修員が、帰国後にその研修内容とは全く異なる仕事に就くことも珍しくない。

パラオの人口構造を見ると、女性は20～24歳で2.8%、25～29歳で3.2%、30～34歳で3.9%と、同年代の男性(それぞれ3.6%、3.6%、4.7%)に比べて人口が少ない(廣瀬 2016)。この年代は大学・大学院への進学、就職の機会と一致する年代と一致しており、パラオの女性が男性に比べて進学や就職を外国に求めていることを表しているとも取れる。パラオ国立奨学金委員会の奨学金合格者の資料を見ると、2004年度については女性125人に対して男性50人、2005年度については女性139人に対して男性39人、2006年度については女性121人に対して男性56人、2007年度については女性130人に対して男性52人、2008年度については女性105人に対して男性69人と、女性の奨学金獲得数が男性を大きく上回っている。女性が男性に比べて高等教育の機会やより収入の高い仕事を求める意欲が高いことについては、母系社会の仕組みがパラオの女性に対して親族集団への経済的な貢献を強く求める伝統に関係していることがわかっている(廣瀬 2009)。そのため、親族集団の女性グループでは親族女性がより良い教育や職業機会を得ることが出来るようにお互いに支援し合うことが知られている(廣瀬 2013)。

(2) 日本政府国費留学奨学生から

パラオでは自治政府を設けた1982年から日本政府国費留学の奨学生を募集している。募集開始の1982年から2000年頃まで46名が日本政府から奨学金を獲ているが、そのほとんどが専門学校への留学であった。1994年に独立国となる以前はアメリカが国連の戦略的信託統治領であり、パラオの若者はアメリカの大学に留学し、卒業後は信託統治政府の役人として就職することが多かった。その一方で、大学に代わる教育機会として日本の専門学校が活用された。専門学校では電気工学、土木、農業、ホテル経営など職業訓練の分野への進学が多かったが、卒業後は必ずしも専攻分野で就職するという傾向もなく、より良い就職機会を得るための手段の一つとして考えられていたと考えられる。2001年頃から専門学校だけでなく国立大学の学部、大学院への国費留学生が目立つようになった。特に2002年以降は大学院への進学が顕著になっている。パラオの独立以降、アメリカとの間で締結した自由連合協定を活用して、アメリカで職を得たいと考える若者も増えるにつれて、アメリカへの進学を望む若者も増加した。日本の専門学校で学ぶには日本語を習得する必要があることや、卒業してもパラオ・コミュニティ・カレッジ(PCC)と同じ準学士しか取得できないこともあり、徐々に人気下がっていった。他方、2002年頃から日本の大学院への留学が増えているが、そのほ

とんどがアメリカの大学で学士を取得し、パラオの公的機関などで働いていたもので、キャリア形成に日本の国費留学を利用している傾向がうかがえる。2009年頃までのパラオにおける日本政府国費留学は日本大使館推薦が一般的であり、また入学試験における日本語試験の成績は参考扱いであったので、アメリカの大学を優秀な成績で卒業している志願者にとっては比較的受験しやすい奨学金制度であると言える。一方で、大学院で日本に留学した学生は日本語運用能力については日本語で授業を受けざるを得ない専門学校生に比べて低く、パラオにおいて親日知日派として知られる人物は専門学校留学生が多い。また、表1において、日本政府国費留学生の男女比については60名中36名が女性であり、ここでも女性の進学熱の高さをうかがうことが出来る。また、大学院では就職のためというよりは、専門性を深め知的な好奇心を満たすための進学で、専攻も経済学(男性)、心理学(女性)、アジア太平洋学(女性)、社会学(女性)、薬学(男性)、国際協力学(女性)、文化資源学(女性)と多様であるほか、7名中5名が女性とその比率が高いことがわかる。

第1表. 日本政府国費留学奨学金によるパラオ人留学生 (1982~2014年)

No.	M/F	入学年	専攻	進学コース	帰国後の主な住所	帰国後の仕事	業務内容
1	M	1982	電気工学	専門学校	パラオ	公務員	船舶操作
2	M	1982	農学	農業大学	アメリカ	N/A	N/A
3	F	1982	日本語	専門学校	パラオ	日系企業	営業所長
4	M	1983	電気工学	専門学校	パラオ	公務員	観光関係
5	F	1983	電気工学	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
6	F	1984	ホテル経営	専門学校(中退)	パラオ	公務員	事務職
7	F	1984	観光	専門学校	パラオ	保険会社	事務職
8	F	1984	土木工学	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
9	M	1985	農学	専門学校	パラオ	教育	短大講師
10	F	1985	秘書学	専門学校	パラオ	教育	小学校教師
11	M	1985	農学	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
12	F	1986	観光	専門学校	グアム	N/A	N/A
13	M	1986	映像メディア	専門学校	グアム	N/A	N/A
14	F	1986	情報技術	専門学校	パラオ	N/A	N/A
15	M	1987	情報通信	専門学校	N/A	N/A	N/A
16	F	1987	情報技術	専門学校	パラオ	公務員	事務職
17	F	1987	写真技術	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
18	M	1988	土木工学	専門学校	パラオ	公務員	公共事業管理職
19	F	1988	秘書学	専門学校	パラオ	公務員	事務職
20	F	1988	N/A	N/A	ヤップ	N/A	N/A
21	M	1988	建築	中退	パラオ	建設会社	経営者
22	F	1989	情報技術	専門学校	パラオ	公務員	中小企業局長
23	M	1989	電子工学	N/A	N/A	N/A	N/A
24	M	1990	情報工技術	専門学校	パラオ	公務員	統計専門職
25	M	1990	電子工学	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
26	F	1990	秘書学	専門学校	パラオ	公的機関	N/A
27	M	1991	情報通信	専門学校	パラオ	公的機関	技術者
28	F	1992	ホテル経営	専門学校	アメリカ	N/A	N/A

29	F	1992	ホテル経営	専門学校 (中退)	パラオ	帰国同窓会	会長
30	M	1992	土木工学	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
31	F	1993	ホテル経営	N/A	N/A	N/A	N/A
32	F	1993	情報通信	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
33	M	1993	N/A	N/A	パラオ	民間企業	N/A
34	F	1994	土木工学	専門学校	パラオ	民間企業	社長
35	M	1994	観光	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
36	F	1995	N/A	N/A	アメリカ	N/A	N/A
37	F	1996	ホテル経営	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
38	F	1996	観光	専門学校	アメリカ	N/A	N/A
39	F	1997	N/A	専門学校	パラオ	公務員	事務職
40	F	1997	観光	専門学校	N/A	航空会社	N/A
41	F	1998	秘書学	専門学校	オーストラリア	N/A	N/A
42	F	1998	ホテル経営	専門学校	日本	公務員	事務職
43	M	1999	建築学	専門学校	グアム	N/A	N/A
44	M	1999	土木工学	専門学校	サイパン	N/A	N/A
45	F	2000	情報通信	専門学校 (中退)	アメリカ	N/A	N/A
46	F	2000	ホテル経営	専門学校 (中退)	グアム	N/A	N/A
47	F	2001	英文学	国立大学	パラオ	公務員	カウンセラー
48	M	2001	観光	専門学校	パラオ	公務員	日本語教師
49	M	2001	電子工学	専門学校 (中退)	パラオ	ホテル業	スタッフ
50	M	2002	経済学	国立大学 (院)	パラオ	民間企業	経営者
51	F	2004	心理学	国立大学 (院)	パラオ	公務員	カウンセラー
52	F	2004	アジア太平洋	私立大学 (院)	パラオ	公務員	事務職
53	F	2004	観光	専門学校	パラオ	民間企業	経営者
54	F	2004	社会学	国立大学 (院)	日本	専門学校	講師
55	F	2005	ホテル経営	専門学校	N/A	N/A	N/A
56	M	2005	薬学	国立大学 (院)	パラオ	公務員	研究員
57	F	2006	国際協力	国立大学 (院)	アメリカ	N/A	N/A
58	F	2007	文化資源学	国立大学 (院)	パラオ	公務員	事務職
59	M	2012	栄養学	専門学校	日本	N/A	N/A
60	N/A	2014	N/A	国立大学 (院)	N/A	N/A	N/A

出典：パラオ・日本政府国費留学生帰国同窓会他の資料・聞き取りから筆者作成

まとめ

鶴見は、非西欧社会の住民が内発性から外部との接触で得たものを採り入れ、多発的・多系的な発展に到達することは可能であるという（川勝・鶴見 2008）。この考え方に従えば、西欧合理性の成果物を巧みに採り入れることで、地縁・血縁が息づく伝統的な社会においても、新たな内発的発展を喚起することが可能であると言ってよいだろう。その土地のヴァナキュラーな生活世界を熟知しない外部者が制度設計に深く関与していること、そして自らの生活世界を外部に説明できないパラオの若者もまた増えていることは、パラオの内発性を制度に反映させるうえで高いハードルである。

本稿では年代の異なる 3 名の女性の経験から学んだ。この 3 名は有力な親族集団に属し、平均以上にパラオの社会や文化に通じていると見做すことのできる人物であった。それにもかかわらず、パラオにおいて重要とされてきた伝統的知識やその継承についても体系的に理解しているということは難しいと感じた。思えば、これらの知識はパラオの生活のあらゆる場面で時間をかけて身に付ける類の知識であり、パラオの人々にとっては当たり前すぎるものであったことから、敢えて体系的な知識の学びを意識する必要はなかったと言えるのかもしれない。このように考えると、今後パラオ女性の母系親族集団における役割や相互協力について知る上では、知識人や有力者に限定した調査よりも、より大きな規模の一般のパラオ人男女を調査対象者に対して概念的な問いではなく、普段行っている具体的な選択や行動について聞き取り、それを分析することでパラオの伝統的知識や抽象的なメカニズムを浮かび上がらせていくという調査の必要性を感じた。今回の調査の反省点を踏まえて、今後の調査を進めていきたい。

本稿は、平成 28 年度 挑戦的萌芽研究 (研究代表者: 廣瀬淳一) 「パラオの親族集団に見られる教育・職業機会を求める女性の相互支援の役割と機能の解明」 (課題番号 16K13137) (平成 28 年度~30 年度) の一環としてまとめられたものであることを申し添える。

【参考文献】

- 1) 青柳真智子『モデクゲイ ミクロネシア・パラオの新宗教』新泉社 1985 年
- 2) 阿部治他『アジア・太平洋地域の ESD<持続可能な開発のための教育>の新展開』明石書店 2010 年
- 3) アレキサンダー, ロニー『太平洋島嶼国の内発的安全—非核・独立—太平洋運動を例に』佐藤幸男編『太平洋アイデンティティ』国際書院 2003 年
- 4) 遠藤央「埋葬の政治学」『政治空間としてのパラオ—島嶼近代への社会人類学的アプローチ』世界思想社 2002 年
- 5) 川勝平太・鶴見和子『内発的発展とは何か—詩学 (ポエティカ) と科学 (サイエンス) の融合』藤原書店 2008 年
- 6) 北川博史「太平洋島嶼国における持続可能な地域経済と地域構造の特徴」『文化共生学研究』第 13 号, 岡山大学大学院社会文化科学研究科 2014 年
- 7) 須藤健一『母系社会の構造—サンゴ礁の島々の民族誌』紀伊国屋書店 1989 年
- 8) 関根久雄「紛争以後—ソロモン諸島と国民的アイデンティティのゆくえ」, 佐藤幸男編『太平洋アイデンティティ』国際書院 2003 年
- 9) 鶴見和子「国際関係と近代化・発展論」, 武者小路公秀・蠟山道雄編, 『国際学—理論と展望』東京大学出版会 1976 年
- 10) _____「内発的発展論の系譜」, 鶴見和子・川田侃 編, 1989 年, 『内発的発展論』東京大学出版会 1989 年
- 11) 西川潤「内発的発展論の起源と今日的意義」, 鶴見和子他『内発的発展論』, 東京大学出版会 1989 年
- 12) _____「内発的発展論の理論と政策—中国内陸部への適用を考える—」『早稲田大学政治経済学雑誌』No354. 2004 年
- 13) _____「パラオにおける女性の自己実現と教育機会—伝統的慣習と親族組織からの期待の中で—」, 『日本ジェンダー研究』第 13 号—日本ジェンダー学会 2010 年
- 14) _____「パラオ女性の日常生活とその変化—『仕事とライフ・イベント』に適した社会デザインを模索して—」『高知大学学術研究報告』62 号 2012 年
- 15) _____「内発的発展における教育の役割を考える—パラオの事例から—」, 『第 14 回国際開発学会春季大会論文集』2013 年
- 16) _____「島嶼世界の内発的発展—パラオにおける自然環境と人間社会の関係を中心に—」, 高知大学学術研究報告 63 号 pp139—153 2014(a)年
- 17) _____「ミクロネシアの島嶼世界と教育制度—パラオの歴史 (1885 年—1994 年) から考える内発的発展についての試論—」『高知大学学術研究報告』63 号 pp156—170 2014(b)年
- 18) _____「小島嶼国家の内発的発展と人材育成 (1) —パラオ共和国の教育基本計画を参考に—」『高知大学学術研究報告』65 号 (印刷中) 2016 年
- 19) DOI (U.S. Department of Interior), (1999), A Report on the States of Islands.
- 20) Friedman, Hal M. "The Open Door in Paradise? United States Strategic Security and Economic Policy in the Pacific Islands, 1945-1947."
- 21) Friedman, Hal M. "'Races Undesirable from a Military Point of View.': United States Cultural Security in the Pacific Islands, 1945-1947." THE JOURNAL OF PACIFIC HISTORY (1997), Vol. 32, No. 1, 49-70.

- 22) Howard P. Willens and Deanne C. Siemer, National Security and Self-determination: United States Policy in Micronesia (1961-1972).
- 23) Kesolei (1997). Cultural Conservation: Restrictions to freedom of inquiry: Palauan strains. Paper presented at the Association of Social Anthropology in Oceania. Workshop on the Role of Anthropology in Contemporary Micronesia Trust Territory of the Pacific Island.
- 24) Kiblas Yalap Soaladaob. (2010), "Cultivating Identities: Re-thinking Education in Palau". University of Canterbury.
- 25) Palau 2000 Task Force (1994) The Palau Master Plan for Educational Improvement, Office of the President.
- 26) Palau Society of Historian, (1998). "Traditional Leadership in Palau". Division of Cultural Affairs, MCCA.
- 27) Peattie, Mark (1988), *Nan'yo - the rise and fall of the Japanese in Micronesia, 1885-1945*, University of Hawaii Press.
- 28) Purcel, D.C. (1967), *Japanese Expansion in the South Pacific 1890-1935* PhD. Dissertation. University of Pennsylvania, Ann Arbor, University Microfilm.
- 29) Richard J. Parmentier. (1987). *Myth, History, and Polity in Belau*. University of Chicago Press.
- 30) The Palau Society of Historians. (1997). *Traditional Education System*. Ed. Bureau of Arts and Culture Koror, Palau: MCCA(2006)
- 31) Wilson, Lynn B. *Speaking to Power: Gender and Politics in the Western Pacific*. New York: Routledge, 1995

¹ 1994年9月27日のアメリカ大統領布告(No.6726)で、同年10月1日に自由連合国として独立した。

² ソアラダオブは「パラオにとっての教育は、フォーマル・インフォーマル、西洋・土着(indigenous)に関わらず、あらゆる形態を包括して行われるべきもの」「しかし、学習はありとあらゆる教育学から取り入れ、特定のひとつのモデルに適応する者であるべきではない」と述べている(Soaladaob 2010: 15)。

³ N氏(40代女性)からの聞き取り(パラオ国会公園にて、2016年8月25日夕刻)

⁴ ウィルソン(Wilson 1995)によれば、ヴァナキュラーなパラオ語には「シュウカン」のように行事を包括するような複雑な概念はなかった。日本統治時代の「習慣」がもとになっている「シュウカン」は日本統治時代に新たに作られた「伝統」の概念であろう。

⁵ 女性の薬師(medicine woman)の指導を受けながら、1日に2, 3回ほど伝統的な薬草を入れた熱湯で蒸気浴を行う。この儀式は新郎新婦の親族の大きさに応じて3日~10日程度の間で行われる(The Palau Society of Historians 1997)。

⁶ パラオではシュウカンのほか、親しいグループでの講(無尽, 模合)があり、パラオの女性は帳面に記録を付けることに慣れている。このスキルは商店の経営などビジネスにも活かされているようである。

⁷ N氏(40代女性)からの聞き取り(パラオ国会公園にて、2016年8月25日夕刻)

⁸ もちろん、ちがう親族集団と言っても、その関係性の濃淡はあるものの同系の親族集団である場合もある。

⁹ パラオでは伝統的にタロイモやタピオカなど炭水化物の調理は女性の役割で、魚や肉などのたんぱく質の調理は男性が行うものとされてきた。食習慣も西洋化してきたことで、炭水化物かタンパク質かで性別分業を厳格に明確化することは無くなっているが、少なくともタロイモや魚や豚肉などを用いた伝統料理の場合には昔からの性別分業を行う。

平成28年(2016)10月12日受理

平成28年(2016)12月31日発行